



会 長 あ い さ つ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会

会長 遠藤 道夫

昨年8月には、全国海外子女国際理解教育研究会の関東ブロック茨城大会が会員の皆様のご協力により大きな成果を修めて開催できました。あれから早くも1年が経過しましたが、この意義ある大会を契機に本会の活動も新たな進展を見せております。

その1つは、帰国報告会や壮行会が徐々に参加者が増え盛り上がりを見せていることです。会員以外の方の参加者があることは海外子女教育や国際理解教育に関心が高まっていることの表れかと思えます。特に、8月に実施されました帰国報告会は年々充実しており、海外における教育に関心をもつ教職員のための効果的な研修の場として好評です。

2つ目は、本会が年間に計画している事業の他に地区ごとの研修会の開催が報告されるようになったことです。このことは、会員同士の研修研究が、地域の実態をよく知っている教職員が教育現場に近いところで実情に即して協議されていることの表れかと思えます。毎日が学校で忙しく勤務している会員同士でありますから、近くに連携しあえる会員同士が深い関係をもって研究し合うことはこれからの教育の姿として注目すべきであるかと思えます。

3つめは、在外派遣を希望する教職員が増えてきたことです。海外における教育に関心をもつ教職員が増え、在外教育施設への派遣教職員が有意義な体験をもって帰国されることは、本会の研究の充実にもつながることです。国際理解教育に深い関心をもって教育的実践力の質の向上を図ることができるよう期待しております。

さて、このような本会の新たな進展の1年間に、我が国では大きな行政改革の波も押し寄せました。特に注目することは、中央教育審議会が「新しい時代の義務教育を創造する」と題して文部科学大臣に答申を提出したことです。私たち、海外子女教育・国際理解教育教育に深く関わる会員にありましては、答申でも述べております「教育の根幹」に改めて関心を強くもって活動を充実させる必要があると感じます。

そこで、会員の皆様、昨年度茨城大会で提案した「基調提案」をさらに実践化し実績を累積させようではありませんか。基調提案の3つのキーワードに照らし合わせ、会員一人一人が国際理解教育における実践的指導を充実させるようがんばりましょう。教育の根幹に通じるこの理念は、全会員が共通に抱き実践化するバックボーンであると思えます。

茨城大会の3つのすばらしいキーワードをみなさまと共にもういちどかみしめ、あいさつといたします。

キーワード1 「日本の文化や歴史を愛する」

キーワード2 「世界と手をつなぐ」

キーワード3 「共に生きる日本人を育む」

在外教育施設に派遣されている先生方からのご便り



フランスは好きだけど、フランス人は・・・

パリ日本人学校教諭 古橋 雅文

英国人曰く「フランスは好きだけど、フランス人は嫌い」だそうである。隣同士の国でお互いにライバル、また、歴史的な背景に由来する面も大きいと思うが、どうやらそれだけではないような気がする。

芸術の都パリと言われるだけのことはあり、中世の雰囲気を残す街並みは一見に値する。また、至るところに大小様々な美術館があり、芸術には疎い自分でも写真や教科書で見たことがある絵画が普通に展示されている。ちょっと中心部を離れると、地平線まで続く緑の大地がある。牛がのんびりと草を食べ、夏の終わりには牧草ロールが置かれている牧場がいたるところにある。何かに急いで生活するのがもったいなく感じる風景がそこにある。英国人でなくても、好きになる景色が沢山あるのがフランスである。

その中で生活するフランス人は・・・という、やはりそう急いでは生活していない。英国人ならずともイライラすることは度々ある。スーパーのレジでは袋に荷物を詰めてから財布を取り出す。レストランでは「ちょっと待ってね」といって10分以上待たせる。歩行者は信号を守らず、渡りたいときに渡り出す。列に割り込むのは平気。自分が悪くても、悪いのは相手であり、自分の責任ではないので謝らない。風邪で病院に行っても、「予約してからにして下さい。予約は3日後」など平気で言われる。

やっぱりフランス人は傲慢で嫌い！かというとは実はそうではない。自分としては「フランスも好きだけど、フランス人も嫌いじゃない」というのが感想である。フランス人はマイペースだけど優しい。フランス人はフランス語しかしゃべらない、英語はしゃべることはできても、決してしゃべらないと言われるがこれは全くの嘘である。こちらがフランス語が理解できないと分かると、すぐに英語でしゃべってくれる。(こちらの人、特に若い世代の多くの人が流暢に英語をしゃべることが出来る)英語でも理解できていないと分かると身振り手振りで、分かるまで一生懸命に話をしてくれる。小さい子どもを連れていると立ち止まり道を譲ってくれたり、かわいいねと話しかけてくることも珍しくない。自分がフランス語を理解できればもっとコミュニケーションをとることができ、もっと好きになることが出来るかもしれない。

しかし、残念ながら語学は赴任当初と変わることなく、全く進歩していない。でも、それは幸いかもしれないと自分に言い訳をしている。フランス人は日本人が持っていない(忘れてしまった?)ものを持っている気がする。もし、フランス語が理解でき、フランス人ともっと分かり合えてしまうと、フランスの生活にどっぷりと浸かってしまい、逆に、日本に帰ったときの生活が不安になってしまう・・・

シンガポール日本人学校 小学部 チャンギ校 小林 雅治

シンガポール日本人学校に赴任しまして、はや、6ヶ月が過ぎようとしています。5年生を担当し、かわいい子供達と楽しく過ごしてきました。この間いろいろな行事がありました。その中で、先日行いました校内の研究授業をご紹介しますと思います。

シンガポール日本人学校チャンギ校では、毎年校内で授業研究を行っています。本年度は「心豊かに、共に生きる子どもの育成」～他者とのかかわりを通して、よりよい自己実現をめざす力をつける～という研究主題を設定し、国語の研究を進めています。1学期に6・1・2年生、2学期に5・4・3年生が実施します。

私たち5年部では「自分の思いや考えを相手を意識しながら伝えようとする子ども」

という児童像を設定し、「対話」というキーワードを設定し、研究を進めてきました。まず他者とのかかわるためには、コミュニケーションをとる必要があります。コミュニケーションとは、他者と自分の自分との単なる意味の伝達ではなく、相互作用を通じて意味を作り出す過程です。単なる「出し合い」ではなく、「対話」であり、相手のいったことを理解し、それに沿って自分なりの考えを返していくことです。他者と「対話」することによって、他者認識をし、同時に自分を見つめ、他者との相違に気づくことで自己認識がなされる。新たな価値観を受け入れ、自己を見直す。その結果自分の考えが、深まったり、変わったり、揺らいだり、確かなものとなった。この過程が自己変容であり、こうして新たな価値観を備えた自分の内的拠り所に到達していくのです。この内的拠り所こそよりよい自己実現をめざす力となるとかんがえました。

今回、「わらぐつの中の神様」の教材を選びました。「わらぐつの中の神様」は、昔語りの前後でマサエの大きな心の変容がみられます。この気持ちの変化をとらえさせることがこの物語教材では大切である。



授業風景の写真

5人のメンバーで、導入から発展までを分担し、指導計画から指導案まで共通して行えるように作成し、研究してきました。研究紀要を発刊する予定ですので、興味のある方は、ご覧ください。

この他、5月に2泊3日の野外活動を実施しました。2学期も日本人墓地清掃やブキティマ山登山などを計画しています。行事などは学校のホームページに載せていますので、ご覧ください。

この他、5月に2泊3日の野外活動を実施しました。2学期も日本人墓地清掃やブキティマ山登山などを計画しています。行事などは学校のホームページに載せていますので、ご覧ください。



サウジ徒然草

リアド日本人学校 伊藤 純一

サウジアラビア王国リヤド市に赴任して1年半が過ぎた。これをお読みの皆様は、サウジアラビアにどんなイメージを持っておられるだろうか。多分、暑い暑い砂漠の国、あるいは大産油国と言ったイメージをお持ちの方が大半だろう。

まさにその通りである。サウジは観光ビザを発給していないので、観光旅行で来られることは少ない。(行きたいと思う人も少ないだろうが・・・) サウジの国内事情も政府がかなりコントロールしているので、いささか謎めいている。そこで、少しばかりこの国を紹介してみたいと思う。

まず、気候のことである。国内の大半が砂漠で夏は暑い。日中は50度くらいまで気温があがる。しかし、湿度が低いので日陰に入ると、意外にしのぎやすい。暑い夏のお楽しみはプールと言ったところだが、プールからあがるとなんと寒いのである。バスタオルで体をくるまないと、寒くて寒くてたまらない。日本人の多くは、バスローブをプールサイドに持ってきて、すぐに羽織っている。これは、気化熱により体温が奪われるからである。

また、冬は寒い。日本は、夏から徐々に秋めいていき晩秋から冬へと移り変わっていくが、サウジはいきなり寒くなる。もちろん、真夏と10月頃では暑さもかなり違うが、それでも暑い。去年は11月下旬に急に寒くなった。前日までTシャツ一枚で過ごしていたのに今日は寒くていられないと言う感じである。寒くなるという話は聞いていたが、

あの暑さから、本当に寒くなるのか信じられず、冬物を用意していなかったもので、かなりあわてた。日本人でも寒く感じるので、インドやパキスタンなどから働きに来ている人々にはかなりこたえるのだろう。冬山登山に行くような格好をしていた。12月1月と寒く2月ごろが良い陽気になる。

砂漠の国なのに、雨も降る。基本的に毎日晴れなので、日本のように天気予報を気にすることは無いが、季節の変わり目には、何回か降る。1時間ほど土砂降りになり、からりと晴れる。道路は雨が降ることを想定されていないので水はけが悪く、あちこちで冠水している。水の中を無理矢理走り動かなくなっている車もあり、大渋滞が発生する。

リヤド市内は、道路沿いには木が植えられ、緑がたくさん見られる。これはすごいことである。1年に数回しか降らない雨は頼りにならない。散水設備がいたるところにあるわけである。また、大きなスーパーマーケットがあちこちにあり、サウジ人が大きなカートにいっぱい買い物をしている。あんなに食べられるのか不思議なくらいである。ちなみに、買い物は男性の仕事である。女性は何もしない。運転も出来ないの自力では買い物に行くことは不可能である。女性は男性の押すカートに欲しいものをポンポン入れるだけ、支払いも男性の仕事である。女性に支払いさせるとドライバーに間違えられ、対応が悪くなる。日本では気恥ずかしいカート押しがこちらでは当然で、私もだいぶ慣れてきた。サウジでは女性の自由がないという先入観があったが、実は女性は大事にされているのである。

サウジには、税金が無い。公立学校や病院も無料らしい。大学に行けば、お金がもらえる。残念なことにわれわれの子ども達は公立学校に入れないので、その恩恵にはあずかることができない。産油国なので、ガソリンは1リットル30円しない。

以上、気がつくままにサウジアラビアの気候や生活について、ごく一部を紹介した。まだ書き足りないことがあるが、この国に住んでみて思うことは、この生活に慣れてみると案外住めば都と言うことである。



世界柔道選手権2005カイロ大会

カイロ日本人学校 教諭 和田尚志

世界柔道大会が当地カイロで開かれました。日本人学校にとっては、夏休みが終わっての最初のビッグイベントになりました。前日できあがった「ガンバレ日本！」の横断幕を持って、大会前の公開練習を見学に行きました。体育館に入ると選手の殺気だった様子を感じたのか、我が校の児童生徒たちも少し緊張した様子でした。簡単なセレモニーの中で、児童生徒代表の指揮のもと「フレーフレー」のエールを送ったところで、選手たちからも笑みが見られ、和やかな雰囲気になりました。その後の記念撮影では、小学部1年生たちが選手の膝にのせてもらうなど、忘れられない思い出となりました。

全校で応援に行ったのは、大会初日でした。開会式では、エジプトが世界に誇るスフィックスが柔道着を着て登場するなど、らしさを存分にアピールしようと努力しているのがわかりました。それでも、一番印象に残ったのは、開会式で怒っていた大会役員でもあり、ロス五輪金メダリストの山下泰宏さんでした。山下さんは、地元の大会関係者を相手に猛烈に抗議していました。その先にいたのは、開会式で世界各国の旗を持った人たちでした。足下にはきちんと靴をはいていませんでした。昼に靴で上がらないのは、当然のこと。会場の観客（あまり入りはよくなかったですが）のなかで、山下氏の抗議を共感できる人はどれくらいいるのかなと思いました。日本の柔道が世界に普及しても、日本の文化を知らない人はまだまだたくさんいるのだろうなと実感しました。

大会初日は茨城県出身の塚田真希選手と鈴木桂治選手が出場し、見事メダルを獲得しました。（本県出身の小野卓志選手の試合ももちろん応援に行きました。）大きな声で、「日本！日本！」と選手を応援しながら、自分は日本人だなと再認識しました。子供たちにと

っても、カイロに来てから一番自分が日本人だと感じた日だったのではないのでしょうか。表彰式では、国歌が流れると観客が立ち上がる光景を目にし、児童生徒たちもそれに合わせて立ち上がる。相手の国に敬意を表すことを実践できました。あつという間の応援でしたが、日本人であることを再認識し、そして世界で通用する人間としての生き方を学ぶことができた大会となりました。児童生徒同様、この時期にカイロにいられたことを心から幸せに感じました。



「あこがれの 派遣員となって」

在コスタリカ日本人国大使館附属サンホセ日本人学校 吉村 俊一

はじめに

この文章をつくっている頃、日本は、15時間も先の時を刻んでいる。こんな不思議な体験をすることができるとは、夢にも思っていませんでした。しかし、今、まさに、国外で生活しています。赴任した当初は、多少なりとももっていた自信を全て打ち砕かれて、真新しい状態から始めました。そして、現在、サンホセ日本人学校の一職員として、毎日全力で職務に励んでいます。「来ることができて良かった。」と毎日、充実感をかみしめ、派遣に協力くださった全ての人に感謝をして眠りに入ります。

1 赴任国事情

(1) コスタリカ共和国

コスタリカ共和国は、北のニカラグア、南のパナマに隣接し、東にカリブ海、西に太平洋を臨む中米の国です。赤道から約北緯 10° の熱帯に属します。スイスと並ぶ「軍隊を持たない国」や「ジュラシックパークの舞台になった国」、また、「老後に住みたい国」、「コーヒーのおいしい国（※最近、コスタリカ産コーヒーが世界一に）」として有名です。

首都サンホセは、標高約 1,100 m に位置していることから、熱帯でありながら、年間平均気温 20° と毎日が、春、秋のような気候です。雨期と乾季がありますが、厳しいものではありません。市内は、東京も真っ青の大渋滞が起こるほどの車。鉄道は、約 10 年前に大地震のため運行を中止しましたが、2005 年に復活しました。

(2) 人

スペイン系白人や先住民との混血の人々が大多数です。昨今は、近隣諸国からの外国人も増えてきています。

とてもものんびりしており、ジョギング以外で、コスタリカの人々が走っている姿をあまり見ません。そのテンポで、横断歩道のないところを恐れも知らず渡っていきます。時には、センターライン上付近で、ものを売る人々もいます。

こちらから、挨拶をすると必ず挨拶を返し、一度会えば、友達と同様になる程、友好的な心を持っています。

しかし、ひとたび、自動車やバイクなどを握るとまるで競争するかのような速さで走る車が多いです。バスまでもが、「早くいけ！」とパッシングをします。

とても、不思議な人々です。「プラ・ビダ」という言葉が合い言葉のように人々の間で飛び交います。「最近どう?」「元気、元気!」という意味らしく、本当に心和やかな人々です。

(3) 教育活動をする上で

赴任する前は、「森の中で授業」を想像していました。小学低学年の国語など、日本ならではの文房具は市内には売っていません。しかし、殆どの文房具を安く買うことができました(コンパスは、質の良いものが日本円にして100円程度で買えます)。

2 研究と実践

(1) 担当学年において

私は、小学部1年生3名を担当しています。2名は日本からの児童ですが、1人は、コスタリカで生まれた児童で、入学当初は、全く日本語をしゃべることも理解することもできませんでした。コスタリカには、「ポコ ア ポコ」という言葉があります。「少しずつ少しずつ」という意味です。この言葉を毎日言いながら、言葉どおり少しずつ繰り返し、粘り強く学習に取り組んでいます。少人数なので、日本では、考えられないほど個に応じて学習を進めることができます。

(2) 担当教科において

担当教科である数学では、前年度まで担当だった先生が、100マス計算をおこない、日本語をあまり理解できない児童生徒も基礎基本の定着がなされています。しかし、中学の論理性を要求される学習では、やはり理解と定着に困難な生徒も見られますが、「ポコ ア ポコ」。教材もやや不足気味ですが、少人数指導でカバーしています。殆どの生徒が、予習、復習をしてくれます。

(3) 校務分掌において

小学部と中学部で行事等に参加するので、ひとつの家族のような学校です。私が担当する「健康栽培委員会」(委員会は3つ)も、コーヒーの木の栽培や持久走記録会の行事などを子供達と職員が一丸となって企画運営していきます。

(4) 研究において

本年度、小学部1学年を担当したことから、現地保育園の教育事情を調査し、日本人学校入学後の教育に生かせる材料を考察し、教育活動に活用することを研究しています。日本においても、「いかに就学前教育と小学校教育をリンクさせるか」は、重要な課題だと思います。また、本年度、校内研修では、資料集の編纂があります。研究、研修に研鑽し本校教育と帰国後の教育活動にいかしたいと考えています。



コスタリカ日本人学校開校20周年記念写真



2005.9.30第31回開校式典にて

赴任国事情 「1239番現地校における英語指導について」

小沢 浩

ロシア1239現地校を訪問して、生徒の英語力の質の高さに驚いた。それを支えているのは、厳しいまでも徹底して英語が理解できるようにするために、生徒自らが自分の力で学習することができるように学習の方法をよく教えていることである。それに加えて、小学部2年生からの継続した英語教育といえるであろう。1239番現地校を訪問して調べたこと・感じたことを赴任国事情として記したい。

1239番現地校は公立学校で、1958年に創立された。現在約800人の生徒が在籍している。小中高一貫教育であり、11年生(小：1～4年生、中：5～9年生、高：10～11年生)までである。旧ソ連時代から英語専門学校として知られ、今もその伝統を受け継いでいる。英語科における授業時数及び教員数は表(注)にあるように、英語の授業が導入されるのは小学2年生からである。1レッスン45分授業で、1教師が受け持つ最大生徒数を25名までとしている。それよりも生徒数が多くなってしまえばクラスを分け、効果的な授業ができるようにしている。

1239番校の英語科のねらいは大きく3つあり、一つは、生徒が親とともによく海外(ヨーロッパ)に行くため、そこに行ったときに自由に英語で話せるようになることである。二つめは、生徒自らが自分の力で学習することができるように学習の方法をよく教えることである。毎日かなりの量の課題が出され、生徒はそれを自力で解き、トピックをまとめたり、エッセイを書いたりすることで、より深い授業を目指している。三つ目は、学んだ知識を英語で表現できるようにする、また自分の意見を表現できるようにすることである。以上、1239番校の教師は、生徒が英語を学ぶことの必要性を与え、授業で自分の意見を述べることの大切さを教えている。また、継続した英語教育により英語の基礎となるボキャブラリーや文法力、そして発話能力を高めている。小学部から継続して何度も繰り返しながら、必要な単語や表現・文法を学ばせることによって、正確な英語が話せるようにさせている。そして自分の思っていることを英語で話す訓練を継続してすることで、躊躇なく話せる素地を作っているのである。日本の中学からスタートする英語学習と比較してみると、すでに5年間もの隔りがあり、それらが明らかに英語能力の差を生み出していることは確かである。

さて、1239現地校で成功している英語教育を日本の英語教育にどのように生かして行けばよいのであろうか。インプットにおける時間やアウトプットにおける時間の総



小学校の英語の授業

数の差を埋めることは不可能である。しかし、生徒自らが自分の力で学習することができるように学習の方法をよく教えていくことは可能である。そのことにより、時間的な総数を埋めることは可能だろう。また、応用力を身につけさせるための基礎となるボキャブラリーや文法事項を繰り返し復習させることで、それをベースに話す場面を与えることは可能であろう。今後の課題としては、生徒にどのような課題を与えれば自らの力で学習を進め、自己の力を高めていくことができるのか、さらに研究を進めていきたいと考えている。

(注1)

学年	小学2年	小学3年	小学4年	中学5年	中学6年	中学7年	小学8年	中学9年	高校10年	高校11年
授業数	3	3	3	5	5	5	5	5	5	5
グループ数	2	2	3	2	3	3	4	4	2	3

英語における1週間の時間数とクラス数

上海日本人学校 糸川 宏

こんにちは。2005年4月に、取手市立野々井中学校から上海日本人学校に赴任した糸川宏です。

上海日本人学校は、在外教育施設としては世界有数の大規模校で、小学部50クラス、中学部10クラス、約2100人の児童・生徒が在籍しており、その数は増え続けています。語学学習にも力を入れており、小学部1年生から中国語と英会話を学習しています。

上海は、過去と未来が一体となった街です。特異な形のテレビ塔「東方明珠塔」を始めとする浦東の高層ビル群は、未来都市を想像させます。一方、旧イギリス租界時代の建築物の残る外灘（ワイツン）、豫園（ヨエン）で有名な旧城内は古い上海の雰囲気が残っています。成田からわずか3時間ととても近く、観光地では日本人観光客をよく見かけます。

上海に生活して感じたことは、モノや人の差が激しいということです。高級ブランド店の隣に一皿3元（約45円）の点心の屋台があったり、ヨーロッパの高級車のとなりを2元（約30円）で乗れる公共バスが走っていたり、綺麗に着飾った人とパジャマ姿の人が道ばたで仲良く話していたり、カットの基本料金が500元（約7000円）の美容院の近くに10元（約140円）の床屋があったり、とにかく差が激しいのです。

このような社会に生きる外国人として、日本人としての自分を上海に適応させながら生活しています。

改めて感じた教育の大切さ

サンパウロ日本人学校 根本 英生

ブラジル国における貧富の差は、とても激しいと感じます。片や高級自動車を乗り回し、休日にはヘリコプターで別荘へ。片や仕事に就けず、毎日の食事や住む場所の確保さえままならない、といった様子です。駐在員としてここブラジルで暮らす日本人は、私自身も含めてとても裕福な一握りの人々ということになります。

町では小銭を稼ぐために、信号で停車した車の窓拭きをする人、物乞いをして歩く人を日常的に見かけます。それは小さな子どもから若者、老人、そして赤子を抱いた母親、身体が不自由な人など様々です。ブラジルでは約三千万人もの人々が非常に貧しい生活をしています。一ヶ月に一人あたり4,000円以下の生活費しかないという想像を絶する状況です。そのため子どもたちも家計を助けるために、何らかの収入を求めて活動する必要に迫られ、まともに学校へ行くことができません。そのため大きくなってからもよい働き口が見つからず貧しさから抜け出すことができません。すなわち貧困が無教育につながり、無教育が貧困を再生産するという悪循環に陥っていると考えることができます。

また、ブラジルの都市部では、あちこちに「ファベラ」と呼ばれる、いわゆるスラム街が点在しています。ファベラとは山の斜面や川沿い、高架下などの空いている公有地を不法占拠してできた集落のことであり、その数は今なお増加しているそうです。ファベラが抱える問題には、衛生状態や治安の悪さなどがあげられます。居住権が認められていない不法占拠地であることから、公的なサービスを受けることができないからです。そしてよい教育を受ける機会に乏しく、失業率が高く、生活に希望がもてない環境には暴力や犯罪が蔓延しがちです。厳しい生活の中、押し出されるように路上へと流れていく子どもたちも大勢います。街の人々、警察官でさえも、そして時には家族からさえも疎まれ、生きていかなければならない子どもたち。盗みや犯罪に手を染めなければ生きていけない状況下にある子どもたち。そんな中、生まれてくる子どもたち。生きていくために、真に



通勤途中にあるファベエラ

教育を必要している子どもたちがいることを痛感します。
今、私は、改めて、自分自身の職務である学校教育の在り方について考えさせられています。

ドイツ・デュッセルドルフ日本人学校

平成 17 年度派遣教員 栗原 和彦

快適な街デュッセルドルフ

本校のある、ドイツ・デュッセルドルフ市はライン川がつくるなだらかな平原にあります。緑が本当に豊かで、街中でもリスや野うさぎの可愛らしい姿を見かけることもあります。ノルトラインヴェストファーレン州の州都であり、人口は約 60 万人。北東部には「ルール工業地帯」が広がっています。機械、金属、エネルギー分野の主要企業本社の他、経済団体、工業団体が本部を置いており、50 カ国に及ぶ外国系企業が進出しています。とりわけ日系企業の数は、約 340 社に上り、約 6000 人の日本人が生活しています。そのため日本の商品も豊富にあり、日本人にとってはとても暮らしやすく、便利な街であると言えます。中央駅に近いイーマンマン通りには日本国総領事館、日本クラブ、日本商工会議所をはじめとして、日本のデパート、銀行、ホテル、書店、旅行代理店、美容院、日本食のレストラン、日本食良品店などがあり、日本人が生活するのに必要なものがすべて揃っているといえるほどです。



ライン川の向こうに見えるアルトシュタット（旧市街地）

本校の特色

本校は創立 34 年の歴史をもっています。児童、生徒数は 2005 年 10 月現在、小学部 422 人、中学部 139 人、計 561 人です。年々数は減少しているとはいえ、ヨーロッパにある日本人学校としては最大規模を誇っています。保護者の仕事の関係で転出入が多く、年間に総数の 3 分の 1 の児童生徒が入れ替わることもあります。

「ドイツにある日本人学校としての特性を生かす」ことを教育方針に掲げ、小学部 1 年からドイツ語の学習をしています。交流活動も盛んで、現地校や姉妹校との交流学习や、サッカーやバスケットボールの交流戦を定期的に行っています。

学校行事が充実しています。中でも学校祭は 1 年のうちで最も盛り上がる行事の 1 つで、各学年ともステージ発表と展示発表をします。中でも生徒自身が作り上げる創作劇は、学校祭の目玉の 1 つです。



▲ 中学部 3 年 創作劇



▲ 小学部 3 年 フォークダンス（ドイツ民族衣装を身につけて）

デュッセルドルフ日本人学校に赴任して

念願の日本人学校。それもドイツ。赴任が決まった時の身が引き締まるような思いは、今でもはっきりと自分の心の中に刻み込まれています。新しい環境で戸惑うことは今でも度々ありますが、恵まれた教育設備、生活環境の中で、自分が出来ることを精一杯やろうと思っています。また、ドイツから日本や世界を見つめることで、自分自身の国際感覚を身につけることが出来たらと思っています。



ブラッセル日本人学校 橋本 慎一郎

9月の終わりだというのに、朝晩は吐く息が白い。「ああ、ここは日本ではないな。ベルギーだな」と肌でベルギーを感じている。思えば多くのおみなさんに見送られながら派遣されてから約半年がたとうとしている。

何もわからない状態の4月に比べ、今は少しずつではあるが学校の状況や地域、そして国の状況がわかるようになってきた。

ベルギーの法律では、14歳未満の子どもは、保護者かそれに準ずる大人といっしょでなければ外出することはできない。もちろん、子どもだけの留守番も法律に反する。子どもを保護するということは社会的にあたりまえのようになっている。夕方や休みの日に街中へ出かけても、子どもだけで出歩いている光景はなく、家族で行動しているのがあたりまえである。

しかし、日本人学校の子どもたちには弊害が出てきている。親への依存が日本よりも高くなるのである。担任をする5年生でも、忘れ物をすると母親のせいにする。「お母さんが用意してくれませんでした」といった具合である。当然親は、「ごめんね。今度から気をつけるね」といった具合である。公衆電話で忘れ物の催促をすれば飛ぶように届けてくれる母親。忘れたことへの反省が子どもの中にはない。父親の赴任で現地に来ているので、母親は専業主婦である。これも子どもの親依存に拍車をかけている。

ベルギー人の場合は、家族いっしょにいる時間が長くても、自立させるところは厳しくしつけをしている。

来年度に向けて、今から私たちは教育課程の見直しを行なっている。いずれ日本に帰国する子どもたちが、日本でもすぐに適応できるような学校でなければならぬと考えてすすめている。そのためには、はじめから親依存の体質をなくさなければならない。

各教科や学年の活動で、自分自身を知ったりの自分の思いを相手に伝えたりする活動を積極的に取り入れている。また、自分のことは自分ですするというめあても掲げている。「自分で育てているインゲンマメだから水やりも忘れないよ」、「自分の考えを相手に伝えると、自分の中でもまとまってくるね」こんなことばが、クラスの5年生の子どもたちから出るようになってきた。4月に出会った子どもたちからは想像もつかないことばである。

場所が変わっても「子どもたちのために」という考えは同じであると確信し、これからも子どもたちの支援に全力を注ぎたい。

「経験の継続性」から統合・発展へ

大連日本人学校 海老原 満

1973年7月、大学3年生の私は日米学生会議に参加した。日米双方の学生60人ほどが約1ヶ月間寝食を共にしながら、東京・飛騨高山・金沢・京都を舞台に、日米両国の政治・経済・文化・教育などについて議論し、大学生としての提言をまとめた。国際経済学を専攻していた私は、日米経済摩擦の背景に関心を持っていた。前年（日中国交正常化

の年でもあった) 1ドル=360円から変動相場制に移行したばかりで、日本脅威論が叫ばれ始めた頃である。討論を重ねるにしたがって、ひとつの経済事象が軍事・政治・歴史観・価値観・民族性などと深く関わっていることを肌で感じた。

昨年70周年の節目の年を迎えた日米学生会議は、今年のテーマを「共に創る明日～戦後60年を今日振り返る～」とした。私が注目したのは、8月の東京サイトに中国の学生を招聘し、2泊3日で日米中3カ国の学生達が政治・経済・文化などについて議論する企画であった。中国で今、大連日本人学校に勤務している私も、何か行動を起こさなければならないという気持ちに駆られた。わずかな金額ではあるが、この企画にささやかな寄付をした。議論の報告が日米学生会議のホームページに掲載されるのを楽しみにしている。

9月3日は、中国にとって特別の日だ。「抗日戦争勝利記念日」で、今年は60周年記念行事が北京の人民大会堂を中心に実施された。60年前、日本が戦艦ミズーリ上で降伏文書に調印した9月2日の翌日を記念日にしている。日本では、8月15日を「終戦記念日」としているが、国の歴史認識で異なるものだ。中国の日本人学校で子どもたちを教育していく上では、日中間の近現代史に精通することが肝要だ。一時帰国の際、日本・中国・韓国が共同編集した「未来をひらく歴史 東アジア3国の近現代史」を購入し、共通の歴史認識＝「歴史尺度」を身につけるように心がけている。

大連日本人学校の子どもの父または母の3分の1は中国人だ。価値観(歴史観を含めて)、慣習などをお互いに尊重しなければならない場面は多々ある。例えば、祝祭日は基本的に5月の労働節、10月の国慶節、1月または2月の春節(陰暦に従うので年によってちがう)という中国の暦と同じにしている。

在外教育施設は、いろいろな意味で国際関係の最前線にある。大連は、北朝鮮と国境を接する遼寧省、遼東半島の先端に位置する。そのような環境の中で、北は北海道、南は沖縄県から派遣された14人の同僚と一緒に勤務している。そうしながら、華甲を迎えてからの将来の自画像を描きつつある。昨日・今日・明日の経験を基に、国際理解教育に取り組み、日中の架け橋として活動している私である。

現地校との交流を通して

ブエノスアイレス日本人学校
教諭 今瀬 智洋

本校では、現地理解教育の一環として現地校との交流を行っています。主な相手校はイングリッシュ校(創立120年の私立学校でアルゼンチンに初めてサッカーが伝わった学校)で、小学部1年生から中学部3年生が年間5、6回ずつ交流しています。今回は各学年の今年度の取り組みを紹介します。

小学部1、2年(第2回交流6月21日)

最初にハンカチ落としをやりました。次に4つのグループに分かれて、生活科で準備しておいた「日本の遊び(けん玉作り)」「迷路双六」「ストライクアウト」「ボーリング」をやりました。スペイン語でのルーツ説明が大変でしたが、楽しい交流となりました。

小学部3、4年(第2回交流6月7日)

サッカー、かくれんぼを予定していましたが、あいにくの雨で、室内で坊主めくりをしました。さすが4年生、すぐにルールを覚え「ボウズ!ボウズ!プリンセサ!」などと叫んだり笑ったり・・・大好評でした。

小学部5、6年(第2回交流8月24日)

習字に挑戦です。イングリッシュ校の児童にとって初めての習字体験です。「un Palito, y un palito」日本人学校の児童がスペイン語を駆使し、書き順、筆使いを上手に教えました。難しい漢字に挑戦する児童もあり、自分の作品を大事に持ち帰ってくれました。

中学部(第2回交流8月25日)

日本人学校、イングリッシュ校の生徒が3つのグループに分かれてそれぞれがスペイン語で台本を作り最後にステージで発表し合いました。簡単なストーリーは日本人学校の生徒がスペイン語で予め準備し、そこにイングリッシュ校の生徒が会話を付け加えてくれました。より自然な台詞になりました。「風邪予防法」「ゴジラ出現」「ディスカウントの仕

方」。楽しい劇になりました。

このように、児童生徒はそれぞれの言語や文化に触れ、交流を深めています。交流を通してアルゼンチンの文化に触れるだけでなく、日本の文化を再確認することもできました。この経験を生かし、日本と海外の架け橋になってほしいと願います。



小学部1, 2年生 1



小学部1, 2年生 2



小学部1, 2年生 3



小学部1, 2年生 4



小学部3, 4年生 1



小学部3, 4年生 2



小学部 3, 4 年生 3



小学部 5, 6 年生 1



小学部 5, 6 年生 2



小学部 5, 6 年生 3



中学部 1



中学部 2



中学部 3



中学部 4

シンガポールのバスから思うこと

シンガポール日本人学校チャンギ校 忍田 哲郎

シンガポールに赴任して半年が過ぎようとしています。住まいがMRT（電車）の駅からは遠く、バス停には近いことで、主な交通手段はバスということになりました。シンガポールのバスは国内を網の目のように結んでいる上、料金もとても安く、S\$2もあれば始発から終点まで、または途中で乗り換えても目的地まで行くことができます。但しバス停が多いので、目的地までの時間が結構かかります。

バスに乗り始めて目についたのは、ローカルの人々のマナーの悪さでした。携帯電話や隣の席の人と大声で話をする、二人乗り座席に詰めないで一人で座る、通路に足を投げ出して座る、車内は飲食禁止なのに平気でジュースを飲む等の姿が見られました。そんな様子を見てシンガポールの人々はみんなマナーが悪いのだなと思えてきました。そんな時、同じ赴任1年目の人たちから、バスでの出来事を聞きました。一つは、シンガポールへ来て間もない子が、一人でバスに乗って家へ帰る途中、降りるバス停を間違えてしまった話でした。バスを降りたが何処だかわからず、所持金もなく途方に暮れていたところ、近くにいたローカルの人が声をかけてくれました。そして、どのバスに乗り何処で降りればいいのか教えてくれ、S\$2を渡して「これでバスに乗って帰りなさい」と助けてくれたそうです。もう一つは、幼い子を抱きベビーカーをバスに乗せようとした母親が、度々見ず知らずの人から手助けしてもらったことがあったそうです。

これらの話を聞き、目の前の目立ったマナーの悪さ、一部分の人々の行為から、全てのシンガポールの人々を悪く見ていた自分の考えを改めるべきだと考えました。マナーの悪さで言えば、日本の電車の中でも同じような光景は目にします。しかし、それだけで日本人全てのマナーが悪いとは思われたくありません。異国の地に来て現地理解をする上で、ある一部分を見てそれが全てと考えるのではなく、多方面から見て理解を進めていきたいと考えます。時間がかかる不便さを感じながらも、ローカルの人々の様子を垣間見られる



バスにこれからも乗り、滞在期間中、少しでも多くの現地理解に役立てていきたいと思
います。

ギリシャの社会科教育

アテネ日本人学校校長 菊池 修

在外教育施設で勤務する派遣教員は現地の教育事情を調査することになっています。こ
のことは皆様もご存知のことと思います。私は昨年度、ギリシャの公立小学校の社会科教
育について調査しましたので、皆様にもご報告したいと思います。しかし、字数の関係上、
要点だけになってしまったことはご容赦願います。

1 指導時数

- (1)「わたしたちと自然」という教科書により、1年生から4年生まで週3時間
- (2)歴史は3年生から6年生まで週2時間
- (3)地理は5年生と6年生が週2時間

2 指導内容

1, 2年生の「わたしたちと自然」という学習は日本の生活科に似ています。家族の役
割やバスの乗り方、駅の様子、港や山などの学習をします。3, 4年生になると県名や県
庁所在地まで広がります。

3年生の歴史は「古代ギリシャ神話」という教科書を用いて学習します。4年生から本
格的な学習となり、ギリシャ文明の誕生から古代ローマ帝国までを、5年生はビザンチン
時代からトルコに征服されるまでを学習します。6年生はトルコ支配のギリシャから独立
戦争、軍事政権の崩壊など、現代までの学習となります。

5年生の地理はギリシャの位置、自然や地形、産業の様子を学習し、6年生になるとア
ジアやアメリカなど、世界各地の気候や自然、地形や産業などを学習します。

3 日本の社会科との相違

地理では気温と植物の関係をはじめ、地球の自転と日照時間の関係など、理科学的な内容
が含まれています。また、自然保護や動物愛護などの公民的、道徳的な学習もします。

歴史の教科書では戦いの様子を記載した文章や武器のさし絵が非常に多く、現代に至る
まで、多くの戦いに勝ち得た結果であることが強調されています。

6年生の地理の教科書では日本の紹介がありました。「日本の火山」というタイトルの
写真と次のような文章で日本を紹介しています。

日本は資源が少ない割に大きな工業が発達し、世界でも最も経済が発達している。
農業もとても盛んである。日本の大きな力となっているのが人材で、世界で最も教育
レベルが高く、とても仕事をする人たちである。

ミラノ日本人学校の子どもたち

ミラノ日本人学校 田地 英樹

子供たちの登校は8:00から。スクールバスや保護者の送迎で次々と登校してきます。
バスケットボールコート1面もとれないような小さな体育館で朝のミニスポーツ開始。曜
日によってドッジボール、リレー、尻尾とりなど、全校児童生徒の約半数の50人前後が
毎日参加してきます。短い中休みとお弁当の後の昼休みは、小さな中庭で譲り合いなが
ら遊んでいます。6時間~7時間の長い授業が終わると下校。ここから校内では美術、作文、
数学、英会話などの講座開始。多くの児童生徒が参加しています。放課後、講座のない曜

日には、サッカー、野球、テニス、バスケットボール、アイススケートなどのスポーツスクールで汗を流す子供たち。思い切り体を動かすには小さすぎる体育館とグラウンドに加え、「中学生にあがるまでは子供同士で外出できない。」という国の事情で、思いっきり遊ぶことも難しくなっています。子供たちの体力も低下し、「思い切り遊びたい！スポーツしたい！」という欲求もなかなか満たされていないようです。

上で述べたような辛い現状がある反面、在外施設ならではの素晴らしい体験も数多くしている子供たち。小学部1・2年では、農場での体験活動。馬に乗ったり、自分で採った卵を使ってのクッキーづくりをしたり。3・4年はワイン工場見学。工場見学だけではなく、実際にブドウの実を収穫。

中学部の体験学習では、2000～3000m級の山に挑みます。

過酷な自然環境の中、励まし合いながら山小屋を目指していく。今までに見たこともないような動物に遭遇し、そして、大自然の中で星を眺める。

写生会では、ゴシック建築など、重厚かつ繊細な建造物を実際に目にして描いていきます。このような体験を通し、子供たちの感性や創造性が磨かれていきます。

いろいろな苦悩を抱えながら生活する子供たち。そして、子供たちと一緒に奮闘する教師たち。本年度30周年を迎え、児童生徒と教師が一体となって素晴らしい学校生活を送っています。



「日本人らしさ」ということ

フランクフルト日本人国際学校 山脇 信至

ドイツでの生活も1年半が過ぎました。昨年度は自分の言葉の問題について書きました。その後どうなったかということ、お恥ずかしながら英語とドイツ語チャンポンで、レストランや買い物では、さほど困ることはなくなった程度です。今後もドイツ語習得に向けて、努力していきたい所存です。

本年度は、学校のことを少し紹介したいと思います。フランクフルト日本人国際学校は、今年創立21周年を迎え、小学部192名、中学部68名、計260名の、いわゆる日本でいう中規模校です。フランクフルトがあるヘッセン州では「小学1～4年生までは一クラス30名まで」と決められているため、だいたい一クラスの児童数は20名程度です。日本と比べると一クラスの児童数が少ないので、個への対応がよりいっそう求められます。この1～4年生というのはドイツのグルンド・シューレ（基礎学校）にあたり、彼らはこの後若干10歳にして、大学に進むのか、専門学校へ行くのか将来への選択を迫られます。ゆえに、この年代の児童には少人数制で教育にあたるというドイツの教育方針がうかがえます。日本でもクラスの少人数化が叫ばれていますが、このドイツの考え方も参考になるのではないのでしょうか。

話がそれました。フランクフルト日本人学校の様子です。最初の1年を終えたときの私の感想を思い起こすと、児童生徒や先生方のしていることが、もしかすると日本の学校よりも日本的



だ、というものでした。先生方は、ドイツにいるからこそできる体験をさせる一方、常に日本を意識し、児童が日本の伝統や生活様式を身につけることができるようにと配慮して、日々の学校生活を送っています。子供たちも日本の外にいるからこそ、日本に注目し、また、ドイツについても学ぶことで国際的な感覚を養っているようです。最近では愛国心のない日本人が多い、といわれることもしばしばですが、どうやら誤解のようです。普段は見えなくても、ひとたび外に出してしまうと、愛国心という物が顔を出すようです。陸続きの国境を持たない島国日本では、「自分の国」を意識する必要が無いわけで、自分の国について誰かにアピールする機会もなく、国際的な感覚を身に付けるのが難しいのも致し方ないことなのかもしれません。ここでは、そこかしこで母国、日本への愛情を感じます。ドイツにいながらにして、日本で生活しているような感覚を覚えるようなところ、それがフランクフルト日本人学校です。

砂漠からの贈り物「デーツ」

サウジアラビア王国 ジッダ日本人学校教諭 雨貝 康雄

派遣三年目も既に半年が過ぎてしまいました。一昨年は本校の学校教育について、昨年はラマダン（断食月）について拙稿をお届けしました。今回は「デーツ」について説明させていただき、私の責を果たしたいと思います。

砂漠からの贈り物。まず頭に浮かぶのは石油です。ここサウジは世界有数の原油産出国です。それだけ？ではありません。実はサウジの重要な輸出品の一つがデーツなのです。

その正体、中学時代、地理で学んだ「なつめやし」のことで、それをこちらではデーツと呼んでいます。西アジアやアフリカの乾燥地域に自生するヤシの一種で、ナツメ型の長径五センチメートル前後の実が枝に鈴なりになります。実は糖分・鉄分・ミネラルに富み、乾燥させれば長期間保存できます。アラビックコーヒー（本当のコーヒーではない）を飲みながらデーツを食べるのが、この辺の人々の習慣として定着しています。実のみでなく、とがった葉は屋根・バッグ・シート・履き物など住居・日常生活用品に、幹は建材（昔ながらの住居の柱や梁など）に、根は燃料に用いられ、古くからこの地域の人々に「母なる樹」と呼ばれている必要不可欠な樹木です。砂（土）漠の企業的農場に栽培されているものから、民家の庭先、果ては道ばたにも、ここでは日常的にデーツの木を見ることができます。もちろん、本校にも植えてあります。以下、本校の木を観察してみました。五月。花の枝に、小さく地味な花がたくさん咲きます。六月。花が緑色の小さな実に変わります。八月。実は長径三センチメートルほどに育ち、黄色に変色します。この頃から店先に並びます。かりかりした触感が楽しめますが、甘さより渋さを感じます。九月。実は大きくなり褐色に変色し、干からびてきます。十分甘く、ここからしばらくが旬です。

デーツと一口に言っても産地によって色、大きさ、味に違いがあります。（私の場合、イスラム教第二聖地のメディナ産が一番です。乾くと黒色で黒砂糖と同じコクのある甘さです。値も張ります。）そのまま食べるばかりではなく、種を抜いてアーモンドを入れたり、表面をチョコでコーティングしたり、ジャムにしてクッキーとして売られているもの、シロップに加工されているものなど、バリエーションにも富んでいます。ここに来て初めて知ったことですが、広島特産の有名なお好み焼き用ソースにも原料としてデーツが入っています。サウジ産かどうかは知りませんが、独特の甘味・風味が出るのでしょう。

以上、授業などで話の種にさせていただければ幸いです。

古代の巨大遺跡と近代的な高層ビルが共生する街カイロ

平成16年度派遣 東茨城郡 常北中学校
カイロ日本人学校 校長 檜山 美則

市内の在留邦人は約850人、カイロ日本人学校はギザの3大ピラミッドが望める場所であり、設備の整った学校に現在49人の子どもたちが元気に通学しています。

カイロの熱い風

カイロにはいつも熱い風が吹いています。砂漠からの風ばかりでなく、時代の熱い風も吹いています。中東和平交渉での対話の場として、また、各地の内戦情報の集約地として。

エジプトの魅力

帰国した教員がエジプトの魅力を次のように述べています。

- 第5位 ナイル川と砂漠（エジプトはナイルの賜）
- 第4位 紅海（珍しい熱帯魚と友達になれる）
- 第3位 カイロ（古代と現代が混じり合った奥深い街）
- 第2位 古代遺跡群（たくさんのピラミッドや人知れず眠っている遺跡）
- 第1位 エジプトの人々の優しさ（街中にあふれる笑顔）

エジプトに生活していると、生活習慣の違いや価値観の違いに戸惑い、エジプト人に対して腹を立てることがあります。でも、ひとしきり怒りをぶつけると最後は笑って、「マーレーシュ」（仕方ないか、気にしなくていいよ。）となります。これもエジプト人の優しさを知っているからかもしれません。

現地の教育事情

エジプトの教育制度は1999年に小学校教育が5年から6年間に延長され、「6.3.3.4」制になりました。公立小・中学校は校舎・設備の不足から午前部と午後部に分けて授業を進めているところもあります。義務教育への就学率は約75%ですが、学校に行かせないからといって特に罰則はありません。高校及び大学への入学試験はなく、在学時の成績で合否が決められます。大学は全国に19校あり、そのうち4校が私立学校です。エジプトの法律により、公立小学校・中学校・高校は日本人等の外国人子女の入学を認めていません。

カイロ日本人学校

本校は1971年に開校し、1987年に新校舎を建設して現在地へ移転しました。平成3年には湾岸戦争勃発のために臨時休校になったり、1997年イスラム原理主義者による観光客銃撃事件で日本人観光客が大幅に減ったりしましたが、現在は治安は比較的よくなっています。

2005年9月現在小学部37名、中学部11名の計48名の児童生徒が在籍しています。教職員は文部科学省からの派遣教員11名、現地採用教員4名、現地採用職員11名の計26名です。

本校の教育は①人間尊重の精神を育てる。②生きて働く学力を育てる。
③充実した体力・気力を育てる。という3つの柱で進められています。

国際理解教育

本校では、海外で生活するという利点を生かして国際理解教育に力を入れています。海外生活を充実させるために、アラビア語会話と英会話の指導を行っています。習熟度により、アラビア語は3クラス、英会話は2クラスから希望のクラスを選択し、エジプト人教師を中心に少人数指導をしています。

また、近くのアルスーンスクールとの交流を定期的に行っています。アルスーンスクールは、市立の小中高一貫教育で、授業は英語で行っています。お互いの学校での授業参加や運動会への招待、スポーツ交流などを通して、学校を離れても友達になっている生徒もいます。

現地理解教育

本校では砂漠に木を植える全校植樹活動を、毎年カイロとアレキサンドリアの間にあるワディナトルーンというところで行っています。昨年子どもたちが植樹した木には番号札が付けてあり、自分の木がどれだけ生長したか確かめることができました。

修学旅行は例年ギリシャですが、去年はオリンピックの混乱を避けるため、シナイ半島へ変更しました。中東戦争の激戦地を見学したり、モーゼが十戒をを授かったというシナイ山へラクダで登ったり、世界中のダイバーの憧れの地、紅海のシャルムエルシェイクの近くで海水浴をしたりと、古代遺跡以外のエジプトを満喫した修学旅行でした。

今年の夏、私が予約していた隣のホテルは爆弾テロで爆破され、たくさんの死傷者がでました。我が家からほど近いカイロ博物館前でも自爆テロがありました。よく行くスーパーは爆破予告があり、暫く行けませんでした。いろいろあるけれどカイロは平和で、日本よりずっと安全だと思います。

冬にはギザの3大ピラミッド近くの砂漠道路で、ピラミッド持久走大会が開催されます。子どもたちだけでなく、保護者・先生も参加して、体力にあわせた距離で汗を流します。

カイロ日本人学校では、これ以外にも様々な特色ある教育活動を行っています。帰国しても困らないように、個に応じた指導を充実させ、学力向上にも力を入れています。詳細について知りたい方は、本校のホームページをご覧ください。

●ホームページアドレス

http://www.010.upp.so-net.ne.jp/cairo_jpnsc/



アンネ・フランクを追って

ベルリン日本人国際学校 弦巻 文男

今年の夏、任国外旅行を利用してオランダのアムステルダムを旅した。「アンネ・フランクの隠れ家」を訪れるためである。

きっかけは昨年12月に学校行事で行った遠足だった。「グルーネヴァルト」という小さな駅に行った。その駅はかつて、ナチス軍がユダヤ人を強制収容所に運ぶ列車の出発駅であった。また、本校があるベルリンのヴァンゼー地区には、いわゆる「ホロコースト」が決議された「ヴァンゼー会議場」があるでも知られている。

悲しい歴史を持った施設が身近にあることに、とても驚きを感じるとともに、もっと詳しく知りたいと思った。

隠れ家で、アンネ一家は約2年間暮らし続けた。「アンネの日記」を読んで隠れ家を想像し、実際にその場所



← アンネ・フランクの隠れ家

に行き想像と現実とを比べてみた。暗い、狭い、不衛生。こんな場所で、よく2年間も暮らしていたなど、驚きしか出てこなかった。

アンネ一家と共に暮らしていたフリッツ・プフェファーは、ベルリン近郊にある「ザクセンハウゼン強制収容所」に収容されていたこともある。ここでは、人体実験も行われていた。

またつい先日、職員研修として「アウシュヴィッツ強制収容所」にも行くことができた。隠れ家生活が見つかって、アンネが最初に連れてこられた場所である。あまりにも残酷すぎる光景に、思わず目を背けたくなった。

アンネが最期を遂げた場所、「ベルゲンベルゼン強制収容所」にも足を運んだ。ハンブルクの南に位置するこの場所は、現在は博物館や展示物はあるものの、そのほとんどが森になっている。

今年、ベルリンの中心地・ブランデンブルク門近くにユダヤ人慰霊墓地が完成した。第二次世界大戦当時のドイツは、ヨーロッパ周辺各国をはじめ、世界中に多大な害を及ぼした。その罪を償うかのごとく、さまざまなことに取り組んでいる。

また、今年は戦後60周年ということで、ベルリン市内で普段は一般開放されていない施設や記念碑などが、公開された。ホロコーストに関するガイドツアーに参加してみた。周りはほとんどドイツ人だったので、ガイドの説明はもちろんドイツ語。言葉はほとんど分からなかったが、参加した人たちは、過去に自分たちが犯した過ちという事実をしっかりと受け止め、今後どうしていくかということ真剣に考えているように見えた。

当たり前なことだが、世界中で争いごとが一つもなく、みんなが平和に、幸せに暮らしたら、どんなに素晴らしいだろう。15年という短い人生だったアンネの生涯を追ってみて、そんなことを考えさせられた。そして、自分には何ができるのだろうか。今後、それを探っていきたいと思う。



↑ アウシュヴィッツ強制収容所の入り口



↑ 強制的に切られた四人達の髪の毛。これで布を作った。



↑ 市内のユダヤ人慰霊墓地

あ と が き

ここに、2005年度の広報誌をお届けいたします。諸般の事情により広報誌をお届けすることが遅れたこと、深くお詫び申し上げます。

今回の広報誌には、会長の遠藤先生を始め、海外の先生方からたくさん原稿をいただきました。お忙しい中、原稿をいただきまして、どうもありがとうございました。この場を借りましてお礼を申し上げます。

長年の懸案であった茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会のホームページがやっと開設されました。諸般の事情から開設が遅れたことをお詫び申し上げます。広報誌は、下記のホームページアドレスでもご覧いただけるようになりました。興味のある方は、ご覧下さい。今後は、全海研の各県のホームページからも見られるよう整備していきたいと考えています。ホームページアドレス <http://ibakaiken.hp.infoseek.co.jp/>

今後も「茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会広報誌」をよりよいものにしていきたいと思っておりますので、広報誌に関するご意見がございましたら、広報・研修担当役員まで遠慮なくご連絡ください。なお、Eメールでのご意見は、下記のメールアドレスまでお寄せ下さい。Eメールアドレス ibakaiken@yahoo.co.jp (文責 河嶋)